

令和2年5月11日発行 春燈/第75巻第5号(毎月11日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

5月号

2020 May



久保田万太郎の句

囀りや己のみ知る死への道

「春燈」昭和三十六年

けたたましい鳥声の中舞台の幕は上がる。「囀り」は生命力溢れる生への讃歌である。舞台は一転、生と対峙する「死」の登場。観客は驚愕しつつも己が「死への道」を慮るだろう。万太郎は、この二年後〈湯豆腐やいのちのはてのうすあかり〉の句を残し急逝する。

観客の描いた死の道にもこの薄明りが映ったならば死の恐怖から逃れ穏やかな気持で終幕を迎えたにちがいない。

河崎 國代

久保田万太郎の句

萬葉のむかしより草茂りけり

「春燈」昭和三十六年

掲出句は成瀬櫻桃子編集の『こでまり抄』より選出。原風景を思はせるやさしさと力強さが表現されていて、余あけがらすみじか夜ないてすぎしかなも明易の頃のからすのなき声がきこえるよつで癒される。

万太郎最後の珠玉の句集『こでまり抄』はいつも机辺に置いて、日常句のこの上ない抒情性に、心をかたむけその深さを学んでゆきたい句集である。

石橋 邦子

安立公彦

九十九里浜白波さやに涅槃西風

悠然とみ空をわたる春の雲

堅香子の花に触れゆく受験生

子の墓碑を包む午後の日二月尽

春月の浅黄にくもる時疫かな



燈下集

○ 本田 保

さからはず風に靡くや猫柳

春寒し夢の途切れてしまひけり

春泥や汚れて遊ぶ元気な子

春の泥見え透く嘘をつきにけり

春浅し日差しも風もそれらしく

○ 瀬戸 峰子

昨日より背伸びしてをり福寿草

子等集ひ餅花飾り賑々し

あやかりの餅花作りまめまめし

もうすでに自我に目覚むる冬木の芽

水温み緋鯉真鯉に如意の様

○ 今井 弘雄

電車中咳一つして睨まるる

世の中は風邪のウイルス飛び廻る

古里は朔風すさぶ日本海

店じまひ目につく春の老舗かな

突然の一斉休校春愁

○ 吉川 隆

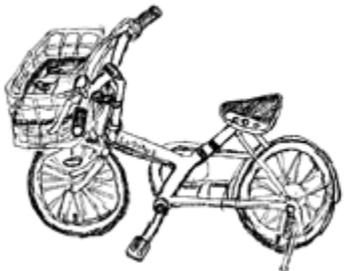
寒明や男の料理教室へ

春灯の明るき舟屋大漁か

拍手に梅花一輪また一りん

花粉症かもしかめつ面の仁王像

幾年も合はぬ友がき卒業期



○ 清水美子

立春や家紋のへりの青畳
沈丁花笑顔に戻る行き違ひ
余寒なほ断捨離できぬ母のもの
病にも祈りあらたか草青む
気負ひなき後ろ姿や春日傘

○ 片山博介

カカココと浅瀬の歌ふ水の春
冴返るステンドグラスの傑刑囚
風罷めばこの世の色に風車
逃げやすき膝のナプキン春の宵
十三の牌並べけり獺祭

○ 府川昭子

包まるる紅白梅や老夫婦
沈丁の蕾に淡き夕日影
夕鴉前山急ぐ春時雨
山肌のくつきり生るる雨水かな
雉鳩のこゑのくぐもる雨水かな

○ 永島雅子

蜆壳の声に目覚むる旅の朝
茂吉忌や甥は医学の道選び
頼み事胸に夫好物の蜆汁
枝払ふや隣より覗く紅椿
入学の友の名僧ゆる子の会話

○ 矢口笑子

梅東風や天神下の交叉点
受験期や方程式で解けぬ恋
十年を見据うる話木の芽立つ
計画の二転三転春疾風
文末の三点リーダー春愁

○ 松山三千江

キングてふ塔の屋上冴返る
梅林の一角を占め陶器市
鷹鳩と化すをはりの見えぬ貨車の列
雲水の大股でゆく古都の春
涅槃過ぐ季節の一つすすみけり

○ 赤羽陽子

雨上がり雲の流るる梅日和
二つ三つ赤き木の芽を数へけり
境内の小さき流れや水温む
青天の空をあらそふ紅白梅
冴返る家路をたどる風の街

○ 大文字孝一

禅堂に「喝」の一声冴返る
愚直なりし父の忌日や梅真白
鶯の声の余韻を惜しみけり
梅東風や願ひに重き絵馬の数(湯島天神)
誰がための我がための雛飾りけり

○ 篠原幸子

梅が香やひと息入るる曲り角
パンジーに強面の人ほほゆるめ
烏どち自慢ののどや冴返る
目に見えぬものの恐さよ春の雷
永き日やパズルの迷路抜けきれず

○ 和田絢子

左義長の残り火に立つ障害児
寒明けて夕山ひとの肌の色
千種川の水光らせて二月尽
手を伸べて濡るるものなし春の闇
晴天の東風渡りゆく朝の街

○ 藤原若菜

穏やかに美しき君が代紀元節
春浅き参道見やる鷹女像
春寒や寄り添ふ鯉の夫婦めく
蜆汁一家言ある母なりき
花束のミモザ溢るる退院日

○ 神田恵琳

春の風邪子の言の葉のきびしさよ
引壳女草餅無しと無愛想
鶯餅あさつてよりと男文字
恋猫の置水呑む音舌の音
朝なさな菊二種の新芽愛づ

〈春星賞受賞作家・特別作品20句〉

うつろふ季節

佐俣まさを

くぐり戸の軋む山門梅ふふむ
山茱萸の金の零るる無住寺や
金縷梅や柵田へ降る九十九折
日照雨去る多摩の横山苔竜胆
手に囲ふ番茶の湯飲み遅桜
城跡てふ粗き石組土佐水木
桜葉降るや苔むす曲輪跡
肅々と雲水の列山法師

藪茗荷宿場へ式里の道しるべ
若武者の馳せたる広野熊谷草
諾々と生きるのもよし滑菟
村雨に姻れる水泡菱の花
古里の昏き湯の宿日照草
歩幅合はせ巡る池の端鳳仙花
花櫛植ゑたる父へ供華とせり
朝霧に響くせせらぎ秋海巢
石地藏にひと叢残す赤のまま
散り残る紫は光に枯尾花
八手咲く柔らかき日のまはり来て
山茶花や動かぬ雲の広がりぬ

奥の旅

田中嘉信

葉桜や屋形行き交ふ隅田川
みちのくへ若葉の風をみちづれに
早苗田に遊行柳の影ゆるる
風薫る奥への関を越えにけり
須賀川の宿や軒端の栗の花
疲れたる身に滝音の清々し
蚊遣火や胸に手をおく鬼女の里
虹立つや悲恋秘めぬる忍摺

城跡の千古の石碑花菖蒲
夕焼の湾の島々浄土めく
遠雷や翁の知らぬ津波跡
青時雨なみの御霊を鎮めけり
義経の悌追ふや夏の蝶
三代の栄華優しさみだるる
山寺の人のざわめき蝉しぐれ
万緑や最上くだりの船頭唄
下闇や修験者と遇ふ羽黒山
果てしなき庄内平野青田波
歌枕巡るみちのく遠郭公
蕉翁の背の遥かや夏の月

余言

安立公彦

身ほとりの臘梅の香を同封す

松橋 利雄

「臘梅」は晩冬の季語。花の姿は紅梅に似るが、香気はより高く色は黄色。作者の庭にはとりどりの花木がある。中でも香気のある臘梅は、同好の士にその香気を観賞して貰いたく、「臘梅の香を同封す」、即ち花卉を封筒に入れて送付するのだった。

「身ほとりの」に親しみを感じる。手塩に掛けて育てた花だ。「臘梅の香を同封す」には、詞客の姿を彷彿とするものがある。この句、まさに俳人の一景だ。

昼月を燻してゐたる山火かな

鈴木 直充

「山焼」の一景である。野焼、山焼など、往時はこのような大胆なことを良く恒例としていたものだ。山焼には、農事への関与もある。古歌にも多く詠まれている。

この句、一望の山焼の上に「昼月」を置いたのが見事だ。枯木や枯草を焼く煙は、山域によっては广大となる。「燻

してゐたる」にその状況が良く出ている。この句を見ると、以前見たことのある、九州阿蘇山の山焼が思いだされて来るのだった。「山火」には詩情がある。

春火桶重ねたくなる手がそこに

近藤 牧男

ヒーターの無かった当時、火鉢、火桶は室内の温暖には必須のものだった。さらに俳句の題としては、ヒーターよりも火桶の方が趣が深いのは言う迄も無い。

この句、「春火桶」でなければ詠めない情景である。春火桶と言う場面の枠があつて、「重ねたくなる手がそこに」の表現が成り立つ。「重ねたくなる手」とはどういう手なのか。作者の思いは当然その手の持主の女性にある、一句善く一場の物語を叙している作品と言えよう。

クルーズ船より友生還す梅二月

卜部 黎子

新型コロナウイルス感染症による被災者は雁大な数となつている。詳しくは末尾の「五風十雨日録」に書いたが、世界規模の流行病は、一国の浮沈に拘わる大事に至ることもあり得る。周遊船で旅に出た作者の朋友は、無事帰国が出来たのだ。「友生還す」に安堵の思いが浮かんで来る。埠頭から見える梅の花が、力強く二月を叙している。

母といふこの世の席や卒業歌

小嶋 恵美

「母といふこの世の席」について考える。この母は「この世の席」に続く。それは彼方の卒業生たちの歌う「卒業歌」に聴き入る母たちである。母の席に腰掛ける母たちが在って、「卒業歌」も成り立つのだ。「母」こそ、物事を生み出す基と言ふべき、「この世の席」である。俳句は決して理屈ではない。道理の道筋に沿う詩形である。

桃の花われに卒寿の男雛在す

諸岡 孝子

「卒寿」は九十歳。世は並べて高齢化の時代。九十歳の男雛に対する女雛は八十七歳くらいか。むしろ「米寿」が釣り合う。八十八歳だ。卒寿と米寿。この句の要点は「卒寿の男雛在す」の「在す」。在すは居るの尊敬語。

この句は、卒寿、米寿の「夫」と「妻」を、男雛、女雛に喩えての作品だ。弥栄を言祝ぐばかりだ。

形よき橋を遠見に青き踏む

長谷川歌子

一読、景が浮かんでくる。悠然と流れる河に架けられた橋梁。その「橋を遠見に」、作者は今その河沿いの草はらを歩いている。草原に芽吹く草叢、まさに青き踏むである。「踏青」は早春の中国での行事に由来する。萌え始めた

荷風忌やあの大黒屋閉ちしとか

小島 昭夫

「荷風忌」は四月三十日（昭和三十四年）八十歳。終焉の地は、千葉県市川市菅野。荷風は昭和二十年、東京麻布の偏奇館を東京大空襲で焼失し、その後処々に転居、翌年市川に移り住み、四番目に住んだ家が終焉の地となる。

「大黒屋」は荷風の家から程近い和食処。その閉店は平成二十九年六月と聞く。荷風はこの店を長年の馴染の店としていた。私が大黒屋を訪れたのは大部以前のことだった。荷風に出していたという、カツ丼セットに銚子付きの定食の味が今も懐かしい。この句、「あの大黒屋」に、作者の永井荷風への思いが善く出ている。

生かざるる命の不思議追儼豆

齋藤 晴夫

「生かざるる命の不思議」に視線が止まる。私たちは我が身の健在を願って、心身の養生に努めている。五感、六境の健全あつて「生かざるる命」である。この句はそこに「命の不思議」を据える。この上五中七は生命の真理と言つて善い。作者は九十七歳。筆致に乱れもない。「追儼豆」の選択もみごとだ。益々のご健在を願うばかりだ。

当月集

安立 公彦選



○ 佐藤 玲子

遠慮がちにわが関東に春一番
二月は閏年なり赤兎の忌
ベビー靴三足春の泥つけて
人通り全く途絶え二月尽
三月のサークルなべて中止とや

○ 中澤 弘

○ 佐藤まさ子

目覚むれば孤独の一閏二月尽
菜の花を見つむる川面ご念仏
面差しの固き佐しさシャボン玉
山笑ふ鮎釣る川面波立ちて
逆波に向かふ小舟や山笑ふ

水仙の香に誘はれて岬道
暖かき言葉に和むバスの中
鶯や木道しばし時を待つ
山道を曲がり山吹咲く丘へ
手作りの雛部屋いつばいに広げけり

○ 田中嘉信

○ 佐俣まさを

冬麗の大観覧車富士近し
春立つや威儀正しぬる大手門
白梅や今日の一日を無垢で生く
紅梅を透ける空の青さかな
うしろ向きに走る少年いかのぼり

野仏の草鞋に鼻緒草萌ゆる
蒼天のかけら生ひ出づ犬ふぐり
梅が香や土手ゆく電動車椅子
口笛の近づく山路春の風
両腕に握るつり草春眠し

春燈の句

安立 公彦選



亀鳴くやふるさとの田に身を立たす
比企一族の墓の大小ふきのたう(鎌倉妙本寺句)

神奈川 辻 泰子

祖師堂脇の池のにごりや落椿
涅槃会の書院の廊下磨かれて

岐阜 高井 修一

川温むしぶき耀ふ水車小屋
漣の襲くだくるや水温む

岐阜 高井 修一

門前の香る老梅木魚の音
三汀忌書肆の消えたる峡の町

福井 西本 花音

名を呼ばれ列ひきしまる卒業子
ひとりつつ目かくしをして雛納

福井 西本 花音

目の細き立雛照らす灯や淡き
一枚の写真みつむる春ともし
年の豆母と分かちて福とせむ
孫知らぬ夫の遺影や雛の部屋

滋賀 馬場 節子

人生の旅は長いぞ山笑ふ

煩惱や払うてもまた春の闇

鬼やらひ長子に代をゆづりけり

栃木 佐藤 忠

春めくや杖をたよりの寿老人

猫の額の土耕してへたばるや

手押し車とめて一息木の芽風

駅前の記念樹ひとつと河津桜

兵庫 片井 久子

今日も訪ふ河津桜と対峙かな

桜の下読みたき本や『歎異抄』

助け合ひみんな生き合ふ母子草(新刊コロナウイルス)

岐阜 種田 利子

時満ちて風吹き落とす蜜柑かな

紅梅も白梅も咲く山路かな

二ヶ月の満月浄土光無礙

春寒しどつこいしよとまた腰下ろし